



それがしも  
いってみるかにゃ

# 書籍の装丁と 印刷術を巡る

場所  
徳島文理大学 香川キャンパス  
リサーチアンドメディアライブラリー1階「記念室」

2022(令和4)年 入場無料・事前申込み不要

11月14日月 ▶ 12月9日金

月曜日～金曜日 9:30～17:00 (祝日を除く)

↑「ライズ」尻尾は何本でしようか?



また  
だか  
ら

しん  
にゃんだ?  
これは?

## 文 理大 と 拙者 助太夫 いたす!

拙者



近世水滸伝 銚子の五郎造(部分)  
金鈴書院 寛文元年(1865)四月刊  
三代豊国画  
文久二年(1862)九月改印  
にほん  
ぶ

→答へ

主 催... 徳島文理大学 比較文化研究所  
後 援... 香川県教育委員会 さぬき市教育委員会 大学・地域共創プラットフォーム香川  
お問合せ先... 〒769-12193 さぬき市志度1314-1  
徳島文理大学 香川キャンパス Tel. 087-899-7100(代表)  
交通アクセス... ○高松駅・瓦町駅周辺から... JR高松駅ーJR志度駅30分・琴電瓦町駅ー琴電志度駅30分  
○JR志度駅・琴電志度駅周辺から... さぬき市コミュニティバス5分・徒歩18分

**都市型キャンパス**

**2025年4月**  
香川キャンパスが  
JR高松駅横に  
全面移転します!

新校舎イメージ  
地上18階地下1階

**130th 2025** Tokushima BUNRI

リサーチアンドメディアライブラリー (図書館)

あなたの未来を創る  
徳島文理大学

中四国最大級の約130万冊の収蔵能力を誇り! 学術雑誌などの豊富な資料を取り揃えた施設。ゆったりとした閲覧スペースや電子メディアなどを活用した自主学習の環境も整っています。



本学では、和装本・洋装本いずれも貴重な古書を多数所蔵しています。今回は和装本の古書を中心として、印刷術の変遷、多種多様な装丁、単色摺と多色摺といった三つの観点から原資料を通じて俯瞰することをねらいとしています。洋装本が主流になった今日において、和装本の持つ魅力と利点、すなわち軽量にして丈夫であること、装丁に傷みが生じて修復が容易であること、そして和本の持つ温もりを感じていただければと思います。また、多様な印刷術を伝える絵入り本や錦絵も展示しています。

# 書籍の装丁と印刷術を巡る

2022(令和4)年 入場無料・事前申込み不要

11月14日(月) ▶ 12月9日(金)

月曜日～金曜日 9:30～17:00(祝日を除く)

## 第一部 印刷術の変遷

- 戦国時代末期に印刷ブームが起こり、江戸時代初期に古活字(主に木活字)版が作られるようになる。
- 江戸時代に営利目的として書籍が商品化されるようになり、かつて仏書などで行われていた整版が復活する。
- 近世後期になると、細密画などを印刷する技術として、銅版が導入される。
- 明治15年頃には、印刷機と鉛活字による活版印刷が主流となっていく。

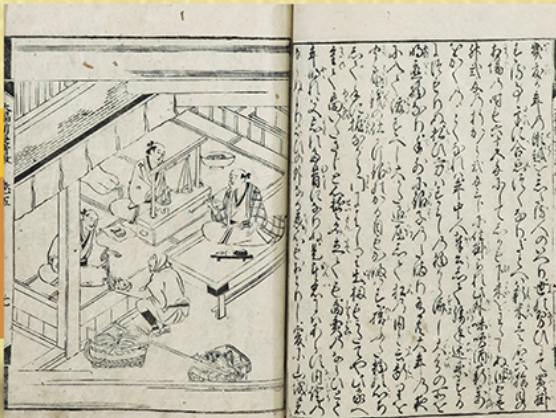


## 第二部 装丁

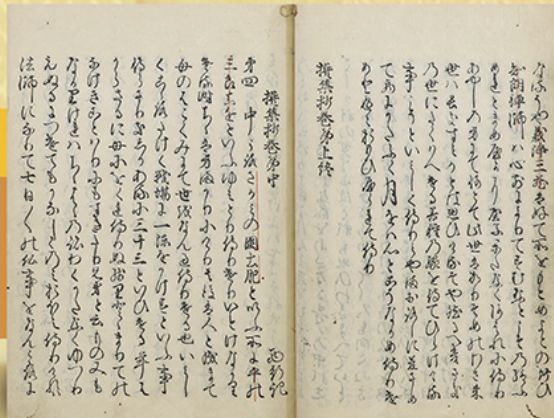
- 和装本の標準的装丁は「袋綴」。片面に印刷した料紙を中央で二つ折りにし、折り目と反対側を綴じたもの。料紙一枚で一丁のオモテとウラを構成する。
- 洋装本は、袋綴とは違い両面印刷が基本。表紙を厚紙にて装丁した洋装本を「ボール表紙本」といい、明治十年代中頃以降、多く出版されている。
- 和装本で袋綴以外の装丁としては、次のものなどがある。
  - ・巻子本…料紙を漉いたものに軸を付けて、巻いて保存できるようにしたもの。
  - ・折本…料紙を漉いたものを交互に山折り谷折りし、折り畳んだもの。巻子本開閉の煩雑さという問題点が解消されている。
  - ・大和綴…重ねた料紙の表紙上部下部二箇所を紙綴で仮綴じたもの。

## 第三部 単色摺と多色摺

- 挿絵の標準は墨一色であるが、薄墨も用いて濃淡をつけて、印刷する場合もある。
- 表紙・見返し・口絵一部の挿絵に多色摺が用いられるジャンルもある。
- 同一作品の初版と後印で摺付表紙の配色が全く異なる場合もある。
- 多色摺の木版画を「錦絵」といい、上半身を描いた人物画を特に「大首絵」という。ワイドな場面を描写するために三枚続きにした錦絵も多い。



日本永代蔵 (にっぽんえいたいぐら)  
井原西鶴作、貞享五年(1688)刊



撰集抄 (せんじゅうしょう) (古活字版)  
慶長期嵯峨本以降の刊(元和期か)



南総里見八犬伝 九頼下駄  
(なんそうさとみはつげんでん)  
馬琴作・重信、英泉画  
天保八年(1837)～十年刊



根南志具佐 (ねなしくさ) 前編  
天竺浪人(平賀源内)作、宝暦十三年(1763)刊



くまなき影 (くまなきかげ)  
梅崖編・是真他画、慶応三年(1867)序